

『地を這う祈り』

2014年11月01日

石井光太氏の『遺体 震災、津波の果てに』は3・11の震災で亡くなった方々がどのように扱われたかに視点を当てた特異なレポートで、痛ましさに胸が痛んだ。石井氏は開発途上国をノートとカメラ（最近ではノートパソコン）を持って訪ね、その地の人々の現状をレポートしている。『地を這う祈り』も、その中の一巻である。「帯」に「世界の貧困を直視した衝撃のルポルタージュ 生きるか死ぬかの瀬戸際」と書かれ、目を覆う惨状が描かれている。このようなレポートを著すようになった動機を書いている。アフガニスタンの難民キャンプに行った時、膿と血の滲んだ包帯を巻き、両方の眼球を失い、砂と垢で汚れた10歳くらいの女の子と出会った。難民たちが置かれた環境の凄まじさ、傷ついた人々や子どもたちが群がって物乞いする姿に、体が竦んで逃げ出した。50mほど走って振り返ると、少女は眼球のなくなった目で、じっとこちらを向いていた。蒼ざめて逃げてしまった自分に愕然とした。以来、少女の姿が心に焼き付き、世界各国での体験を記録し、多くの人に考える機会を提供したい思いになったと言う。

パキスタンの17歳のマララさんが「ノーベル平和賞」を受賞した。彼女は傷つきながら、全ての子どもたちが教育を受けられるようにと発信している。教育は人間に尊厳を獲得させ、文化を積み重ねていく。彼女の声が世界の現実になることを願う。

石井氏は教育以前の生きるか死ぬかの瀬戸際にある人々をレポートしている。私は、バングラデシュに行った時、その貧しさに体がこわばり、言葉を失った。何日かして、この人々も神の赦しの中、是認された生であると受け止めた時、平常心を持って見て、語り合うことができるようになった。石井氏のレポートはスラムでの出会いが多い。彼らの貧しさは半端ではない。ゴミを漁り、わずかのお金に換え、生きている。そこでは、強い者が生き残り、弱い者は退けられていく。殊に、障がい者には耐え難い苦悩がある。しかし、弱い者に手を差し伸べる優しい現実もある。私はバングラデシュとフィリピンとブラジルのスラムに行ったことがある。スラムには案内人がいないと行けない。通り過ぎただけであるが、映像で見るのとは違い、衝撃的であった。

石井氏は案内人をつけ、通訳してもらい、生きた会話をしている。そのタフネスには感嘆する。ストリートチルドレン、売春、人身売買、ドラッグ、テロの被害、臓器売買、障がい者、ハンセン病など、多方面にわたって、写真入りで報告している。中でも、大人の子どもの虐待には怒りを抑えられない。マフィアは子どもの腕を切り落とし、物乞いをさせる。子どもは傷口をわざと化膿させ、憐れみを倍加させて、多くお金を儲けると「ボスもほめてくれるから」と言う。また、テロリストは、まず子どもに家族を殺させ、少年兵に仕立てる。家には帰れないようにするためである。子どもたちは人間の心を失い、野獣になってしまう。そして、彼らが戦死したら、立派な墓に納めると言う。

石井氏は写真を撮る時、気を配っている。どんなにみじめでも、人は誇りを持っている。みじめさに焦点を合わせた写真撮影は傷つける。撮れないケースの方が多いと言う。反面、撮ってくれと依頼される場合もある。もちろん、お金目当てもあるが、自分の現実を世界に伝えてほしいという願望から依頼されることもある。

人類は宇宙にまで飛び出しているのに、地上の現実を見せられ、暗澹たる思いになる。『地を這う祈り』に充満している世界の矛盾は計り知れない。かく言う私も、蒼ざめて逃げだした石井氏と同じように、関係を持たずに、ただ悩ましく思うだけである。